（平成 30 年 11 月 6 日受付）

国産割り箸について

■内容

小学校４年生の社会科で「ごみ」問題を学習しています。ごみを減らすこと、リサイクルの大切さなどを児童と学びました。その中で「割り箸を使わず、マイ箸を使った方が良い」という意見が子供たちからでました。一方で、「間伐材を使っているから、協力して割り箸を使った方が良い」という意見があることも紹介しました。

やはり、間伐材を用いた国産割り箸等を用いた方が、環境や地域のためになるのでしょうか？

■回答

日本は、木の文化を、そして、江戸時代に割り箸を生み出した割り箸の文化を持つ国です。

割り箸は、江戸時代の吉野（奈良県下市町）において、樽材として使っていた杉の端材（※樽の製造過程で、原木から必要な部分を切り取った際にできる余った木片等）を有効利用することから生まれたものと言われています。

国内消費量は平成 24 年度に 190 億膳ですが、この内、価格の安い輸入材が 98％（186 億膳）を占めており、国産は２％（４億膳）です。【林野庁ホームページの平成 25 年度森林・林業白書】

この価格の安い輸入割り箸の影響もあり、国産の割り箸工場は減少の一途を辿り、現在、和歌山県内で割り箸（端材・間伐材を活用）を製造している工場はありません。

海外では、日本と比べて原木（木材）の価格が安いため、原木全てを割り箸に加工します。一方、日本では、原木を建築用材等の製品として利用した後の端材や間伐材から作られており、割り箸を作る目的だけで木を伐採することはありません。

このように、端材や間伐材から製造することで、廃棄されるはずの資源を有効利用し、原木１本当たりの価値を上げることで、山全体の価値を高めます。

また、山の価値を高めることで、森林所有者の「森林整備」や「森林経営」の意欲が向上し、さらに、「森林管理」の担い手確保にまでつながるものと期待をしています。

いずれにしても、日本の割り箸の製造は、本来捨てられるはずだった資源の有効活用に加え、山の価値を上げることで山村地域の活性化にも寄与するものです。

しかしながら、赤道直下等の地域では、開発による森林伐採が深刻化しており、さらに、この地域で生産された建築資材等の木製品が、日本国内で消費される等の問題も議論されています。

これら原木（木材）の利用には、国内外での様々な問題が重なり非常に難しい課題とな

っていますので、小学校４年生の皆さんが「割り箸」を使うときには、いろいろな背景について思い浮かべていただけたらと思います。

【山村林業課 山村振興係】